平成11年11月5日(金)　第56号

進修同窓会々報

発行 土浦一高進修同窓会　編集人 同窓会会報編集委員会 委員長 横田尚義　印刷 常陽新聞社

進修学習館

平成12年度総会案内は8面に掲載してあります。

平成十一年度 進修同窓会総会開かれる

去る四月十一日（日）、本年度定期総会が母校体育館にて、約二百五十名の会員出席のもとに盛大に開催されました。

まず、校歌斉唱・物故会員に対する黙祷ののち、豊嶋貴副会長・長瀬宗男校長の挨拶があり、大曽根宏亮副会長を議長として以下の議事が審議されました。

一、平成十年度事業報告
二、平成十年度決算報告
三、同窓会規約改正について
四、同窓会基金管理委員会規則改正について
五、平成十一年度事業計画
六、平成十一年度予算
七、同窓会基金報告
（A）平成十年度決算
（B）平成十一年度予算

総会で挨拶する豊嶋副会長

八、別途積立金報告の件
九、その他　会員推薦について

十分な審議ののち、全議案とも満場一致で可決・承認されました。

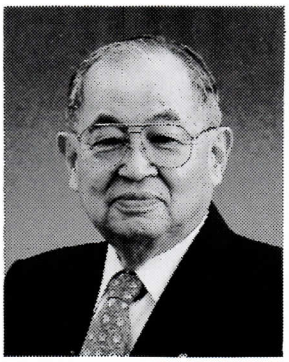
閉会の後、引き続き母校体育館で恒例の卒業周年祝賀式が開かれました。本年は、中三十八回（六十周年）、中四十八・高一回（五十周年）、高十一・定九回（四十周年）、高二十六・定二十四回（二十五周年）の方々をお招きしました。中四十八回と高一回生は同学年のため、本年一緒に五十周年をお祝いしました。

祝賀式では、中四十九回卒で来年五十周年を迎えられる木村厚氏より祝辞が述べられ、招待者への記念品贈呈の後、本年五十周年を迎えられた中四十八回卒の海老原雄一氏より謝辞が述べられました。

また、会場を別に移しての祝賀会では、往時を懐かしんでの交歓が和やかな雰囲気のもとで繰り広げられました。近年、祝賀会への参加者が多くなり、たいへん盛り上がっています。最後に、全員で校歌を斉唱しました。

進修同窓会会長挨拶

会長　幡谷　祐一



正直に言えば、百周年の記念事業も無事終わったことであり、会長を辞任したいと思っております。

それはさておき、景気が悪い、不況だ、とすぐ口に出したがる人が多勢いますが、不況克服は自分の工夫と努力でしなければなりません。金融機関は経営者の梶取の誤りで崩壊続出ですが、預金者保護という大義名分で命脈を保っているところが数あります。あまつさえ、日本の国策銀行である日本長期信用銀行はアメリカの金融資本に買収されることが決定した（十一・九・二九）との報道には愕然としました。

これに関連しますが、「日本はどこへ行く」という石原慎太郎東京都知事とビル・トッテン氏（アメリカ人、アシスト社長、昭和四十七年来日以来日本に在住）との対談（産経新聞）によりますと、日本の技術力は一番高く、アメリカは二番だということです。企業の経営にしても、すぐれていると言われながら、日本人はそれを信じない。外国崇拝の、変な民族になってしまった、とも言っています。

日本は敗戦以来、骨無し国民になったとも言えます。外国崇拝、特に何でもアメリカ的がよく、一番大切なものの一つである雇用についても、簡単にレイオフできる制度を持ち上げたり、履歴書も転職回数が多いものを良いとしたり、またそれを得意になって話している方もおります。

日本は、日本人特有の雇用に対する信頼と伝統的風習によって、今日の発展を遂げてきました。平成十一年九月三十日の日本経済新聞に、アメリカを代表する企業、ゼネラルモータースが終身雇用制度を採用することに労働組合と合意したとあり、驚きました。これは日本の良いところを見習ったものと思われます。真面目に仕事をすれば、一生安心して働けると言うことです。そして、経営者の責任は、働く人達に安心した職場を提供することであり、またその企業を永続させるということなのであります。

さて、アメリカはこの五十年、日本人骨抜き政策によって日本を堕落させようと執拗に計ってきました。しかし、ここにきて多くの人々が目覚めはじめ、これでは日本は駄目になってしまうと、意識を強く持つようになってきたと思います。ほとんど米国一辺倒であったものが、これに対する批判や対談が続出してきたことをみても判ります。

「国破れてマッカーサー」（西鋭夫著）という本などはすごいことを言っています。「平和と民主主義の代償として、憲法第九条の中に埋葬された日本人の誇りは取り戻せるのか」と述べられていますが、これは日本人の誇りを忘れてしまったこととも言えます。

世界中でこの五十年間、いたるところで内戦や戦争が起きています。これは侵略を目的としているのではなく、民族の独立、旧領土を取り戻すといった、民族意識の戦いです。最近の東ティモール問題も、独立の為の流血であります。私たち日本人は、独立というものの尊厳さ、誇りなどは忘れています。最近になって、日の丸と国家が法制化され、認知されることになりました。多くの国会議員が議論して決したことですが、世界の常識からみたら、正に噴飯ものであります。

こういうことを考えると、尊皇攘夷の風土の中から生まれた茨城県人だけでも、国を民族を愛する人々になって欲しいと切望するのです。また、土浦一高という日本に冠たる学校で学ぶ生徒諸君は、日本の歴史を正しく覚え、そしてこの世界に比類なき民族としての誇りと行動を日本の中に芽生えさせる一石を投じて欲しいと願っています。

国と独立の重大さを更に知っていただきたい。

教育改革と本校の教育

学校長　長瀬　宗男

進修同窓会の会員の皆様には、ご壮健にてご活躍のことと心からお喜び申し上げます。

一昨年の創立百周年記念式典に続き、昨年は定時制創立五十周年記念式典を、進修記念館にて盛大に開催することができました。つきましては、進修同窓会会長幡谷祐一氏、記念事業実行委員長（同窓会定時制部会長）柳沢正男氏、同窓会副会長桜井光孝氏を始め、多くの同窓生の皆さんのご協力に感謝申し上げます。この際の記念事業といたしまして、定時制創立当初より発行してまいりました「星座」の創立五十周年記念号を発刊いたしました。昨年四月に「星座」編集委員会を設立し、委員長梅津富士夫氏を始めとする委員の皆さん方の献身的なご努力により、六ケ月という短い期間で立派な記念誌が出来上がりました。また現在の定時制の学習状況等をビデオに収録した「過去よりも未来に夢を」を製作いたしました。ご協力本当にありがとうございました。

本校の定時制は、少子化による中学生の減少にもかかわらず、今年度は一・五倍の倍率でした。入学者の最高年齢者は六十歳の方でした。定年の年で高校で学ぶという姿勢には頭が下がります。生徒もこの「学ぶ姿勢」を十分に感じ取り、精神的な支えにしてくれることだろうと思っております。

現在、学校教育の現場は、小学校低学年までに及んだ学級崩壊、不登校の増加、学校内での暴力行為の増加等、多くの問題を抱えております。そしてこれらの問題を解決していくために、大規模な教育改革が進んでいます。高校教育においても、社会の激しい変化に主体的に対応し行動できる力、いわゆる「生きる力」（自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考える力・正義感や倫理観等の豊かな人間性・健康な体力）の育成を目指して改革が進んでおります。本校でも二〇〇二年から始まる新教育課程にどう対応するか、検討に入ったところです。本校には多種多様な能力を持った優秀な生徒が入学してきます。将来は日本の各界でリーダーになれる素質を備えていると思います。そこで本校の役目は、ありきたりなことですが、「未来に向かって学び続けるための基礎学力、人の痛みのわかるやさしい心、永い人生を生き抜くための心身ともに健康な身体をつくること」だと考えています。これは本校の伝統である「文武両道」につながります。一年生の感想では「中学時代、一高は勉強ばかりの学校だと思っていた。しかし、この三ケ月で考えが変わった。学習、部活動、一高祭等に真剣に取り組む上級生の姿を見て感動した。私達も先輩達から多くのことを学びたい。」と言っています。上級生が見本を示す。そして下級生がその姿に感動し、それを見習おうとする。一高の良さはここにあるのかなと思います。教育課程がどう変わろうとも、この伝統を教職員一丸となって発展させたいと思っています。同窓生の皆様、今後も後輩の為に、どうかよろしくご指導をお願いいたします。

後になってしまいましたが、続いて本校の現況についてご報告いたします。

最初に今春の進学状況ですが、東大への合格者は昨年より少し挽回し、三〇人になりました。県立学校としては全国第二位です。なによりも嬉しかったのは、後期試験において、本校で過去最高の四人の現役合格者が出ました。その四人は、野球部、サッカー部、ラグビー部、応援指導部で最後まで活躍した者でした。最後の最後まで諦めず本気で努力したことが報われたと言えます。また東大文Ⅰには八人合格いたしました。県立学校では全国第一位でした。地元の筑波大学へは五十六人の合格者を出しました。しかし東京工業大学への合格者が減りました。全体の合格率も六一・九％で少し落ちています。この点をなんとか挽回していきたいと思います。その他の大学合格数など、詳しくは「母校だより」の面をご覧下さい。

次に学校行事、部活動等の状況ですが、恒例の一高祭は六月四日～六日の三日間行いました。今年は前夜祭に三年生の合唱が復活しました。早朝に昼休みにと練習を積み、どのクラスも全員が真剣に歌う姿には私も感動いたしました。今年のゲートはノートルダム寺院でした。校門にそびえ立つ六メートルのゲートは圧巻でした。この一校祭にかける生徒達のエネルギーは凄いものです。九月には一高オリンピック、十月には歩く会と学校行事が続きます。一年生は七月に自然体験を兼ねた霜降高原の共同宿泊学習（食事は飯盒炊飯）、二年生は進路講演会、職場見学等、多彩な行事を生徒の自主性を生かしながら行っております。続いて部活動等の状況では、皆さんもご覧になったかも知れませんが、九月三日に放映された日本テレビの高校生クイズで、本校が三位になりました。全国各地の高校生が総数で五万人参加した中、準決勝で敗退はいたしましたが、その知識量には驚かされました。

運動部では、ヨット部が部員三人と寂しいのですが、今年は先輩の方々に買っていただいた新しいヨットでインターハイに出場するとともに、国体にも出場しました。また本校の部活動にはないのですが、ボーリングで二年生が一名やはり国体に出場しております。水泳部も関東大会とインターハイに出場しました。

次に入学選抜制度についても述べておきたいと思います。昨年もお知らせしましたように、平成十一年度入学生の入学者選抜から、隣接県公立高等学校への入学志願者取扱い協定の一部が変更され、千葉県の柏市、我孫子市などの属する第四、第五、第六通学区から本校を受験することが出来るようになりました。今年度の一年生に本校卒業生のお子さんが一名、柏市から入学いたしました。今年の入試も同じように、普通科は県外からの受験生は入学定員の一五％以内と制限がありますが、理数科については制限がありません。入試についてご不明な点がございましたら、ぜひ学校にお問い合わせ下さい。ところで理数科と普通科の相違点ですが、教科書等の教材、授業内容は同じです。しかし理数科は授業科目に理科、数学が多くなっており、理・工学部の進学に適した内容になっています。学校の内容につきましてはインターネットでもご覧いただけます。

最後になりましたが在校生に望みたいことがあります。今、各大学で学生の学力不足が大きな問題になっているようです。大学の勉強では専門的知識を吸収すると同時に、高度な課題探求能力を身につけることが重要です。皆さんが本校に入学した時、中学と高校の授業にギャップを感じたことと思います。大学の授業にはそれ以上の大きな差を感じると思います。しかし大学の授業が理解できるかどうかは、高校時代の基礎学力にかかっています。本校の授業内容を身に付ければ、どこの大学の講義であっても理解できるはずです。そのためにも毎日の授業を大切にし、予習・復習をしっかりやって下さい。

現在の日本の経済は、回復基調になってきたと言われだしましたが、高校生の求人が〇・六二倍で過去最低、十万人が就職浪人になるのではないかと心配されています。今年も各企業はリストラによって生き残りを図り、新規雇用どころではないようです。昨年度の四年生大学卒業生の就職率は、六〇・一％で過去最低、十万六千人が無業者だと新聞は報じていました。しかし企業も人がいなければ成り立ちません。求められる人材は、ただ単に知識量を増大させた頭脳ではありません。知恵があり、創造性豊かで、チャレンジ精神、行動力旺盛な人材です。自分の将来を見据えて、今やるべきことを十分にやっておいて下さい。

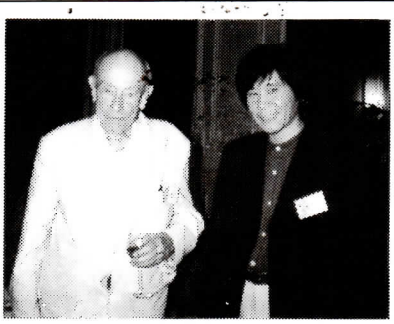
未知の時間

東京大学文学部助教授
一ノ瀬　正樹
高二十八回（昭和五十一年卒）

「プチ家出」という言葉があるそうです。私は先ごろ新聞（一九九九年九月七日『朝日新聞』朝刊）で知ったのですが、それによれば、中高生などが数日から一週間ほど無断外泊することをそう呼ぶようです。この「プチ家出」が増えてきた背景には、携帯電話（ケータイ）が普及して、親もケータイを通じてとりあえず子供の安全を確認できるという、そうした事情が指摘されています。なんとも現代的な現象です。新聞ではさらに精神科医のコメントが引かれていて、最近の若者は、昨日から今日、明日という連続性のなかに自分を置く感覚が極めて鈍く、その場その場で自分を演じるのは得意だが、自分を一つの人格としてまとまった存在にするエネルギーが希薄になっている、という分析が紹介されていました。もしそうなら、「プチ家出」はいささか危険な兆候であるといわざるをえません。すべての社会的活動、道徳的・法的な責任、は個々人の時間的に連続した人格というあり方に基礎づけられているからです。社会の一員である若者たちにそうしたあり方が欠落しつつあるなら、それは社会全体にとって重大な不確定要素になるでしょう。

けれども、私は、哲学を職業にするほどの考えたがりの習性からでしょうか、この「プチ家出」の記事に接して、ある落ちつきの悪さを感じてしまいました。ここでは、過去・現在・未来のなかに連続する人格という（恐らくは大人たちの）あり方が既存の標準として前提されていますが、果たして、そうしたあり方は本当に既存しているといえるのだろうか。時間的に連続する人格などというあり方は本当に成り立ちうるのだろうか。こうした疑問が頭をもたげてきたのです。私の疑問のポイントは、時間の流れを通じて存在するといっても、一体どうやってそのことを確認するのか、という点にあります。

まず、「過去」についてです。「過去」は文字通り過ぎ去っており、もうどこにもありません。実際、いまどこかにあったら、それは「過去」ではないでしょう。したがって、「過去」の自分という人格、は直接に経験することも確認することもできません。記憶があるじゃないか、生々しく想い出せるじゃないか、といったところで、そうした記憶や想起は現在生じている事象であって、「過去」の自分そのものではありません。第一、想起されている「過去」の自分は、あくまで想起されているというフィルターを通じてのみあるのに対して、「過去」の自分そのものは、そんなフィルターなしに、そのままストレートにあったはずです。よって、「過去」の自分というのは、そのものとしては、ないのです。仮にあるとしても、それは決して確認できない以上、未知なのです。ならば、「過去」と連続した自分というのもありえるはずがありません。しかし、では「現在」はどうでしょうか。「現在」は、確実に現前し、疑う余地がないと一見思われます。けれど、ここにも厄介な問題があります。私が疑問にしているのは、時間的な存在をどうやって「確認」するのか、という点でした。その点からすると、「現在」とは厳密には「過去」にほかならないということに気づきます。なぜなら、「現在」はどのようであるかと確認しようとした途端に、もうすでに確認の対象たる「現在」そのものは厳密には過ぎ去ってしまっているからです。かくして、「現在」が「過去」としてしか確認できないなら、「過去」がない以上、「現在」も、そのものとしては、ない、ということになります。たとえ「現在」が真にはあるとしても、確認できない以上、やはり未知である



アメリカの哲学者クワイン氏と
チェコでの国際学会にて

といわねばなりません。

それでは、「未来」はどうなりましょうか。「未来」は文字通り未だ来ず、よって未知であること、これはいうまでもないでしょう。もちろん、私たちは「未来」を何らか見越すことなしに生活を送ることはできません。しかし、そうした見越しはあくまでも推測であり、したがってつねに「未来」への見越しは裏切られる可能性のもとにあります。このことは、科学法則による見越しにさえ当てはまります。一秒後から世界の法則性が変わり、生身の人間が空中を飛べるようになる、といった可能性を消去することは誰にもできないのです。こうした「未来」の不確かさは、科学法則による「未来」への見越しは一般に「過去」のデータや理論に基づいている、という事情に起因しています。というのも、もしそうなら、「未来」といっても、実は「過去」の投影にすぎず、したがってそれは真の「未来」ではないことになるからです。こうして、日常的に見越されている「未来」とは実は「過去」の影であること、さらにそもそも影の主体たる「過去」そのものが存在しないこと、こうした論点を踏まえることによって、やはり結局は、「未来」はどこにもなく、未知であることが理解されるにいたるでしょう。かくして、過去・現在・未来という時間の流れはどこにもなく未知であること、すなわち、私たちはつねに永遠に「未知の時間」にただよっていること、こうした驚くべき帰結が導かれます。

では、過去・現在・未来と連続する人格というあり方は実は錯覚であり、むしろ「プチ家出」をする若者たちの刹那的な生き方のほうが理論的にも正しい、というべきなのでしょうか。そう単純にはいえません。ここで気づくべきは、先の議論は、客観的な時間そのものと時間に対する確認との間のギャップに由来しているということです。したがって、見方を百八十度変えて、時間とはそれを私たちが確認し理解することによって生成してくるものであって、そうした確認と独立の客観的な時間そのものなどはじめから存在しない、と考えれば、そもそもギャップなどないことになりましょう。過去・現在・未来は、それとして理解されたときには確かに存在しているのです。私はそう捉えたいと思います。いうなれば、私たちは何もない未知の領域に、確認や理解という仕方で「時間」を創造しているのです。よって、そこには発明者としての権利と責任が伴っているはずです。しかし、もし「プチ家出」をする若者たちが、時間は刹那刹那の断片にすぎない、と自覚的に責任をもって主張できず、しかも、それにもかかわらず彼らが権利と責任のタームが流布する社会に実は完全に依存しているならば、やはり彼らの行動のなかにある種の病理を見取らないわけにはいかないでしょう。

私はいつも大学でこんな風なことを論じています。ここでの議論によって、私たちには「未知の時間」に向かって自分たち自身を描きこむ自律性が開かれているのだ、というメッセージが、とりわけ在校生の皆さんに伝わるなら幸いです。最近は、土浦一高から東京大学に進学する方が増えているので、もしそうした方で哲学に関心のある人がいたら、ぜひ文学部哲学研究室のドアをたたいてほしいと思います。土浦一高の卒業生として、そして東京大学の教官として、意欲のある後輩に接することはこの上ない喜びです。それでは、本郷の三四郎池の見える研究室で、皆さんをお待ちしています。

【略歴】

一ノ瀬正樹（いちのせ　まさき）

一九五七年土浦市生まれ。土浦一高、東京大学文学部卒業後、東京大学大学院博士課程（哲学専攻）単位取得。東洋大学専任講師、同助教授を経て、現在は東京大学大学院人文社会系研究科・文学部助教授。博士（文学）。著書『人格知識論の生成』（東京大学出版会、一九九七年）により第十回和辻哲郎文化賞および第六回中村元賞を受賞。自宅は土浦市並木。

恩師を訪ねて ④

体育科　冨田　昇先生

在職　昭和十九年～五十年

※赴任当時の土浦中学の様子をお聞かせください。

私が赴任したのは、昭和十九年四月二日、太平洋戦争の末期でしたので、生徒は一、二年生のみ、三年生以上は学徒動員のため、学校には居ませんでした。その一、二年生も何回となく近辺の農家へ勤労奉仕に出かけたものです。仕事中に敵機の空襲を受けるというような体験もしました。教育も軍隊に倣ったもので、配属将校、退役軍人の指導のもと、軍事教練が行われていました。また、夜の空襲の時には市内在住の職員は学校へ駆けつけて防護にあたりました。

昭和二十年八月に終戦となり、書物の中の神社、仏閣等の写真まで焼却され、剣道の防具等は疎開し、米軍人が見回りに来ました。学校が徐々に戦争以前の状況に戻りつつある中で、自由を標榜する気風が蔓延し、生徒の中には多少逸脱する者も出ました。

※学年主任を二回りなさったときの思い出をお聞かせください。

当時は一学年八クラス、学年主任、副主任、担任の合計十名の最も優秀なスタッフによって支えられました。学年の教育一切を任せられ、緊密な連絡、強力なバックアップのもとに学年運営が行われました。週一回の定期打ち合わせを設け、担任の先生方の意見を聞き、学校長にお願いする、そのような段取りのもとで、相違は凡て通ることが出来ました。

学年主任として、入学の喜びを卒業の喜びに直結させることが私の方針でした。四百数十人の生徒を預かり、学業面、健康面、経済面などにおいて、困難な点はあっても、「一人の脱落者も出さない」を合言葉に全力投球しました。皆の希望を適えてやりたい。心身共に強靭な人になってほしい。掛け替えのない人になってほしい。そんな思いでいっぱいでした。あの頃は一週間が早かったですね。

教師にとっては、生徒と触れ合うことが教育の原点であると思います。触れ合いが多ければ多いほどお互いを理解する助けとなり、そこから信頼感が生まれます。私は、教師は常に生徒の中にあるべきものと考えています。宿泊学習を始めたのもその為です。高等学校では、通常行わない家庭訪問も励行しました。生徒、保護者、教師が三者一丸となってこそ、教育の成果があると考えます。

※当時の一高の体育では、柔剣道に力を入れたと伺っておりますが、如何でしたか。

柔剣道にだけ力を入れたというわけではありません。当時、六号国道沿いに格技室があって、格技は一単位、柔道、剣道のどちらも行われておりました。その他、水泳の苦手な生徒には、夏休みに水泳の補習も行いました。当時（昭和十三年頃）、県下にプールのある学校は三校しかありませんでした。水戸一高、日立一高、土浦一高だけです。従って早い時期から水泳指導が出来ましたので、水泳部は活躍しておりました。また、ボート部、ヨット部などは土浦一高の特色とも言えるものでした。その他、一高独自の一高体操を入江信太郎先生が考案なさったり、冬の健康マラソンなども名物と言えるものでした。

※先生の体育教育への信念は「体育が人を造る」ということだと伺っております。

「人間を造る捷径は体育に在り」教室では知性を磨くことが出来ますが、体を鍛えることは出来ません。しかし、体育は身体と共に心をも鍛えることが出来ると考えています。

「象身にして豚頭たる勿れ。鬼才にして蚊身たる勿れ。」これは特に体育教師が留意すべき点です。教師として頑健な身体と才知とを併せ持つように努力しなければならないということです。

※一高柔道部の黄金時代はいつ頃でしたか。

それは、高校九回、十回生と連続して関東大会に出場した頃です。関東大会に出場できるのは、各県二チームだったので、勝ち抜くことが大変だったのです。

その土台を築いたのは八回生の中村信秀主将です。当時は部員も四十名くらいは居ったでしょうか。誠に盛んなものでした。その後、団体戦での活躍はあまりありませんでしたが、個人戦に於ては、二十二回生の大浦民雄君（現土浦一高体育科教諭）が、県大会で優勝し、関東大会に出場しました。

スポーツですから、強くなって欲しいとは思いますが、強ければそれで良いというものではないと思います。柔道を通して、もっともっと、大事なもの、柔道本来の目指すものを身につけて欲しいと思います。

※現在の一高生にひと言お願いします。

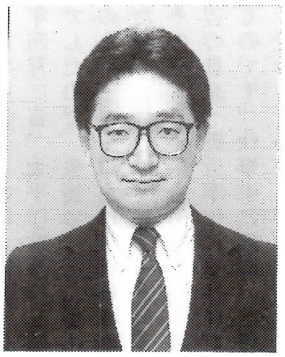
現場を離れて長い年月が経ってしまいましたが、一高の卒業生は全て優秀で、すばらしいと思っています。そして、そのような学校に奉職できたことを大変嬉しく、誇りにしています。

現在の一高生についてはよく分かりませんが、申し上げるまでもなく、心身を鍛え、人間味の豊かな、そして、夫れ夫れの職場に於て掛け替えのない人になって欲しいと願うものです。

平成十一年七月二十八日、進修同窓会館でお話を伺いました。八十七歳とおっしゃっていましたが、現職でいらっしゃった時と変わらないご様子で、当時をいとおしむようにお話くださいました。

卒業生レポート ④

国際交流基金
柳澤　賢一
高二十九回（昭和五十三年卒）



百周年記念誌に続き、再び同窓会事務局からのご依頼で筆をとる次第となりました。文化交流の黒子にしか過ぎぬ者には重い役目ですが、主に若い在校生の皆様の考えるヒントになれば幸いです。

一、文化交流―究極は人の絆

国際交流は、JETプログラム、姉妹都市といった官側のイニシアチブ、企業の社会貢献活動、「難民を助ける会」のようなNGOをはじめとする民の側のイニシアチヴと、担い手も交流の分野も様々ですが、国際交流基金は、文化交流の仕事、特に人文・社会科学系のそれに携わっています。

具体的には、日本研究、二〇〇万人余の学習者を擁する日本語教育、美術・公演・映像といった芸術の分野、出版・放送といったメディアの分野、環境・高齢化といった地球規模の問題についての知的対話など、広汎にわたっています。ただ、いずれの分野においても、個人と個人との新たな絆が結ばれることが交流の果実であり、さらに次なる交流の種子であるという考えに立っています。

文化交流とは申しても基金の仕事は、あくまでも、作家・芸術家、学者・研究者、工芸の職人さんやスポーツ指導者などの専門家を支える裏方です。この場合、私どもの力量は、内外の芸術・学術などの様々な分野について、常に幅広く人と活動とトレンドを調査・把握し、最適な専門家に最適な形で交流の機会（相手国やカウンターパートなど）を提供し、なおかつそれが広い意味で中長期的にはわが国の利益（例えば安定した二国間関係の醸成）にも還元されるようなプロジェクトとして構成できるか、というところで問われることになります。

一昨年は、今村昌平監督の「うなぎ」がカンヌで、北野武監督の「HANA-BI」がヴェネチアでグランプリを獲得した年でしたが、双方の審査員に欧州各国で長年にわたり日本映画を注視してきた有力評論家が複数含まれていたことは意外に知られていません。八〇年代末から北野監督の才能に目をつけて域内上映をめざしていた彼らの企画を、私もケルンでお手伝いしましたが、実験的に紹介した北野作品は、欧州の映画ファンをくぎ付けにし、上映権はたちまちパリのエージェントに高値で買い取られ、非商業ベースの文化交流の手を離れて羽ばたくに至っています。作品の質の高さは論をまたないながら、国際的なコンペでの授賞という輝かしいエポックの影にも、こうした長年の地道な人間関係の積み重ねがある訳です。

基金には、高円宮憲仁親王殿下がおられますが、名誉職でなく担当業務をもって常勤されての二〇年に及ぶそのご在籍は、組織のあり方に有形無形の影響を与えているのみならず、国際交流という私どもの使命に必要な要素を、象徴的に提示されています。

非の打ち所のない英語で数多くの来客にわけへだてなく接し、パソコンとモバイルで内外の友人・知人と自在にやりとりをされる殿下は、また能楽、サッカー、バレー、根付に高い見識をお持ちです。すなわち、多様な文化全般についての旺盛な関心、異質な文化への基本的敬意、自らの文化に対する誇りと深い理解、時代とそれをめぐる環境の変化への柔軟な対応、新しいツールを探り入れる積極さといった資質を、極めて高い水準で兼備されているのです。

二、近況―文明は衝突するか

さて、百周年誌の小論から、文化交流をとりまく状況は、様々に推移しました。就中、「世界中で日本の大衆文化にもっとも厳しい」韓国が、二〇〇二年のワールドカップに向け、日本文化への段階的門戸開放を宣言したニュースは、最大の変化といえましょう。

また、コソボ問題をはじめとする地域紛争の頻発は、グローバル・スタンダードと言う名の実質的な米国支配が世界経済に浸透する中で、文化と民族に対する人間の強い回帰を垣間見せるに至っていますが、これは国際政治における文化・文明的なアプローチがますます有効性を高めている証左と考えられます。

S・P・ハンティントンは、「文明の衝突」論を発展させた著書で、市場経済が世界を均質化し軍事対立は減少するとの見方が一般的な今日、実はその反対に、宗教や伝統文化といった非合理なものが地球の大部分の人々にはより重要な行動原理であり、世界はさらに異質化と対決に向かうとする警告を発しています。ユニークなのは、世界の文明が、なべて複数国を含んでいるのに対し、日本だけが一国で独自の文明を持っているとした仮説で、日本と他国との関係が文化的な絆ではなく、安全保障や経済の利害によって形成されるという主張は、経済危機の時代にこそ含蓄のある指摘に思えます。私ども文化交流に関わる者の役割が、厳しく真価を問われる時代になったと受け止めています。

顧問の喜寿を祝う席で（右から2番目が高円宮殿下）

三、次代の交流―変わるもの変わらぬもの

文化交流は、人、モノ、情報が、大半の国境を越えて、容易、迅速かつ大量に移動できるようになったことにより、表面的にはあり方を変えつつあります。百周年誌では、ビジネスの道具としての英語の必要性を前提に現地語の重要性を再確認したつもりでしたが、予想を越えたインターネットの市民生活への急速な普及は、英語をビジネス・リンガの地位をも超えたものにのし上げました。すなわち、基本的な英語力があれば、自宅や学校にいながらにして、必要十分とは言えないまでも世界中から相当程度の情報を入手できることは皆様もご存知の通りです。

しかし、仮に〝JAPAN〟というキーワードで検索した結果を米国の高校生が机上で眺めたからと言って、日米交流が深まったとはどなたもお認めにならないでしょう。上述の韓国の対日大衆文化鎖国政策の放棄を決定付けた一つの要素としてサイバー・スペースの日韓交流の蓄積があったのは事実ですが、金大中大統領の背中を押して政策の帰趨を決したのは、戦後の長い不幸な時代にあっても、率直な意見交換を通じて交流を積み重ねた李御寧氏（『縮み』指向の日本人」で知られる韓国の初代文化部長官＝文化大臣）ら韓国側と亡き司馬遼太郎氏らわが国の有識者とのすぐれて個人的な信頼関係であったことは忘れてはなりません。

在校生の皆様も、社会科＝暗記物という大学受験の図式をほんの少しだけ踏み越えて、その地の風土と住まう人々の歴史が織りなす日本と世界の文化について、教科書に疑問符を投げかける気持ちで一度取り組んでみては如何でしょう。そこで考えたことを、まずは国語で、そしてつたなくても英語で、論理的に説明できるようになれば、もうあなたは文化交流のスタートラインに立ったも同然です。

国際交流は、決して一部の専門家だけのものではありません。いずれ、多くの先輩後輩各位や成長された在校生の皆様と、世界のどこかでご一緒に国際交流に取り組める日を楽しみに筆を措かせていただきます。

支部だより

霞ケ浦支部発足　設立総会開催

霞ケ浦支部

霞ケ浦町支部は、平成九年の「霞ケ浦町」施行に伴い、平成十一年二月二十七日新たに発足しました。当支部の前身である出島支部は十二年もの間活動が休止されたままとなっておりましたので、新たな形で出発しようということになり設立総会を開催するに至りました。設立総会の準備については開催前の数ケ月間に発起人により、会員名簿の作成等諸々の調整を行ってきました。そして支部設立総会には、三百余名の会員中五十名が出席され、霞ケ浦町のかどや食堂を会場に、同町出身の横田尚義副会長、濱田洋一教頭をお迎えして盛大に開催されました。立花正一（中43回）発起人の議事進行により新しい規約や役員の選任をし、支部長には、寺神戸芳樹（中42回）氏が選出されました。十二年間活動が行われなくなっており、多くの方が支部の行く末を大変心配されていたため安心したとの話があり、これから地域会員の親睦を図りながら、母校の発展に寄与できるようにしていこうということでした。横田副会長からは、現在の進修同窓会の本部の状況について話をしていただきました。特に、当町では支部長不在など諸々の事情により活動が休止されていたこともあり、評議員を輩出できなかったので、今後は本部にも貢献できることになりました。濱田教頭からは、母校の生徒の状況、進学状況等について話を頂き、母校の躍進が続いていることを出席者一同確信されたことと思います。更に会員でもある郡司豊廣町長からもお話を頂き総会を閉じました。

総会終了後の懇親会は、大先輩の発声による乾杯で始まり、杯を交わすほどに話が弾みました。同じ町内に在住しながら日ごろなかなか会えない方たちとの旧交をかわされ、予定の時間をオーバーして談義を続ける方たちもございました。懇親会の中では、なつかしい校歌の斉唱をしたり、母校に関する古い資料を提供下さった会員もあり、母校や当時を改めて振り返る非常に良い機会となりました。

支部長　寺神戸芳樹（中42回）

茨城県庁進修同窓会（県庁桜水会）

本会は平成十一年六月一日現在で、一般会員三百三十二名、特別会員九名（県会議員四名、歴代会長五名）の合計三百四十一名で組織され、職域の支部としては、最大規模の一つと思われる。

定例総会は、去る六月二十五日、昨年同様に水戸市内の三の丸ホテルにおいて、幡谷祐一進修同窓会会長をお迎えして、開催された。

今回の総会は、中川力夫幹事長（昭和四十四年卒）の司会により、小神野博氏（昭和三十九年卒）の開会のことば、押見誠会長（昭和三十五年卒）の挨拶の後、議事に入り、県庁舎の移転に伴う、本会事務所の変更を議決し、引き続き懇親会を行った。

まず、内田一廣副会長（昭和三十七年卒）の音頭による乾杯の後、土浦一高ＯＢで特別会員である県会議員の松浦英一氏、池田有宏氏、足立寛作氏から、会員各位への激励等の挨拶をいただいた。

茨城県庁新庁舎

次に来賓あいさつを幡谷進修同窓会会長、母校の長瀬宗男校長からいただいた。幡谷会長からは、県庁職員への期待と激励の言葉を、長瀬校長からは母校の現況、部活動、進学状況等の説明を含めて挨拶をいただいた。続いて、今春県庁を退職したことに伴い当支部を退会された方々を代表して、常陸胤元氏（昭和三十四年卒）から、県職員時代の思い出や今後の会員の活躍を期待する旨の挨拶をいただいた。

さらに、出席者全員が各部局等ごとに壇上に上がり、近況を報告した。会場内には県会議員、校長、各退職者を中心にいくつものグループができ、それぞれ母校のこと、仕事や趣味等の話題に花を咲かせ、親交を深めた。

最後に、池田正明氏（昭和六十一年卒）の音頭により出席者全員で校歌を斉唱し、元会長の秋田義男氏（昭和三十一年卒）の締めにより散会した。

県庁進修同窓会長
押見誠（高十二回　昭和三十五年卒）

土浦一高ホームページ開設

インターネットにおいて、土浦一高のホームページが開設されました。

学校概要
土浦一高の歩み
進路状況
部活動紹介
定時制紹介
土浦一高写真館
最新ニュース

など、母校の情報が満載です。是非、アクセスしてみて下さい。

アドレス
http://www.net-ibaraki.ne.jp/kou-055

百周年記念誌
進修百年
（B五版一、〇九一頁）
―土浦中学・土浦一高　百年のあゆみ―
価格　三、五〇〇円（送料別）
お問い合わせ
土浦一高進修同窓会事務局
〇二九八（二二）〇一三七

おしらせ　おたより

卒業四十周年記念同窓会

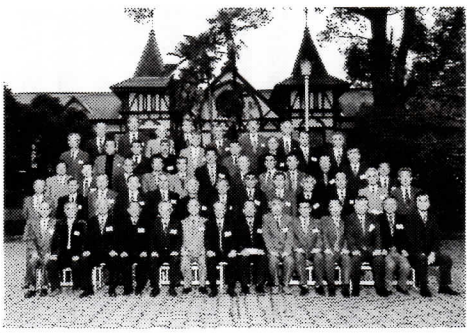
去る四月十一日（日）に開催された進修同窓会総会で私たち高校第十一回生は、卒業四十周年記念の祝賀を受けた。この機会を利用して、十五年ぶりに学年全体の同窓会を開催した。前回も盛会ではあったが、その時よりも同窓の意気が高まっていた感があった。年齢が参加者全員の気分をそうさせたのかもしれない。

この席には、丸木政之助、堀越長次、横田尚義、諏訪正次郎、大竹勉、雨谷昭の先生方をお招きしご出席頂いた（岡田良典先生は十年程前に亡くなられた）。この同窓会への参加者は九十名を超え、恩師や同窓との語らいは尽きることがなく三時間に及んだ。最後は「浜野一望数百里……」の校歌を合唱して散会したが、その直前に「今後は二年毎に開催してはどうか」との提案が出された。これに対し全員が賛同し、この日の同窓会は充実した中で終了した。

私たちは、昭和三十一年に高校に入学し、在学中に「甲子園出場」や「創立六十周年記念行事」などがあった。母校土浦一高の隆盛期にあたっていた。卒業後は、それぞれの分野で活躍してきたが、気が付けば、四十年の歳月が流れていた。十代に出会った友との再会を楽しむ年齢になっていた。

人生はしばしば、「青春」「朱夏」「白秋」「玄冬」の四季にたとえて語られるが、私たちは今まさに「白秋」の真っ只中にある。そして、これまでの歩みを振り返ると、「朱夏」の時期が日本経済の高度成長期と一致している。その意味で、典型的な「右肩上りの思考」の持ち主でもあり、恵まれた世代とも言える。

私たちの同期には地元に残っている者が多く、同窓会の連絡や準備には極めて好都合である。また二十年程前に「一望会」と称するゴルフクラブを作り、年四回のコンペを楽しんでいる。既に七十三回開催し、会員数も四十六名を数えている。しかも、回を重ねる度にその数が増え続けている。



なお、私たちは三百五十一名が卒業したが、そのうち二十三名が亡くなっている。六・五パーセントの比率である。これをうけて、今回の集まりでは健康のことが最も多い話題となっていた。そして、二年後に全員が元気で再会することを契り合っていた。この中に、恩師の六人が含まれていることは当然のことである。（文責　西谷隆義）

卒業二十五周年同窓会

去る四月十二日に、土浦一高進修同窓会総会の席で、卒業六十、五十、四十、二十五周年の記念祝賀会が開かれました。

当日午前中は、雨・風で桜も葉桜になるような天気でしたが、総会が始まる午後には雨も収まり、二十五年振りに会う懐しい顔が、受付に集まりました。また二十五年振りに、土浦一高に入って、旧本館の前に立つと、入学時の感激が時期も同じなので、思い出されました。また校内を歩ってみると、当時と随分変わり二十五年の歳月を感じました。またこの同窓会は、土浦一高進修同窓会が卒業二十五周年記念ということで、企画、運営して下さいました。二十五年間、私の記憶では、同窓会は開かれておりませんでしたので、二十五年前に決まっていたらしい学年幹事の私としては、非常に感謝しております。

また二十五年の年月は、顔、体型を変え、同窓に言われたのですが、卒業当時の写真付ネームプレートを作って欲しいと言われました。たしかに当時の顔を思い出すのに時間のかかる同窓が何人かいました。

体育館で、式典も終わり合同祝賀会の会場（グランドパレス現在ホテルカンコー）へ場所が移り、酒も入り、昔話又、現在の話に華が咲きました。

また歳頃かゴルフをプレーする方も多く、鈴木君の音頭で、七月二十日の海の日に、同窓コンペが開かれたようです。

人数は遠方から来られている方もいるので、少々減りましたが、二次会も行われ大変盛り上がりました。

ここに、このような同窓会が行えたことを、土浦一高進修同窓会、ならびに事務局の足立一夫先生に感謝しております。

どうもありがとうございました。

次回は、四十周年ではありませんが、近々行えたら良いと思っております。

平成十二年度
進修同窓会総会の御案内

次年度進修同窓会総会は次の通り開催します。

例年、一般会員の出席は少数です。同窓会運営に御理解・御協力をいただくためにも、是非御出席下さい。

一、期日　平成十二年四月九日（日）
　　午後一時
二、会場　土浦一高体育館

卒業周年記念祝賀式

卒業六十周年　中三十九回
卒業五十周年　中四十九回　高二回
卒業四十周年　高十二回　定十回
卒業二十五周年　高二十七回　定二十五回

数多くの会員の方が母校の門をくぐられることを期待しております。

尚、総会、祝賀式終了後、市内にて祝賀会を開催いたします。

母校だより

定時制創立五十周年記念事業

定時制教頭　吉武和治郎

平成一〇年一一月八日（日）、進修記念館アリーナに、来賓・同窓生・旧職員など約一八〇名の参加をえて、記念式典が盛大に挙行され、記念誌「星座　創立五十周年記念号」が発行されました。

柳沢正男実行委員長の「経過報告」、長瀬宗男校長の「式辞」、幡谷祐一進修同窓会長の「挨拶」があり、学校への「記念品贈呈」、北島瑞男茨城県教育長代理・吉成宏昭県定通部長・村木良一PTA会長からの「祝辞」をいただき、定時制部会への功労者に「記念品贈呈」が行われました。

その後、場所を霞ケ浦グランドバレスに移し、祝賀会を実施しました。各テーブルでは、旧友が集まり、恩師を囲み、昔話に花が咲くなど、大いに盛り上がりました。

これは、同年四月の第一回幹事会で、記念事業の実施を決めてから、約半年間の短期決戦でした。

事業内容は①記念式典、②記念誌発行、③記念品贈呈（電子ピアノ・視聴覚機器・紅白の幕）、④祝賀会、⑤記念碑建立（学校紹介ビデオ「過去よりも未来に夢を」製作に変更）。寄付金や原稿集め、毎月一―二回の幹事会・編集委員会など、同窓生の精力的な活動によって、成功裏に完遂できました。

関係の皆様、ご苦労様でした。この素晴らしい同窓生の団結力・行動力には、ただただ頭が下がる思いです。現役の生徒にも、多大な良い影響があったと考えております。ありがとうございました。

―第五十二回一高祭―やればできることを証明しました

一高祭実行委員長　細田　翔一

六月四日から三日間、一高三大行事の第一弾である一高祭が開催されました。歴代の先輩方に劣らぬ情熱的な実行委員が集い、昨秋から活動を開始しました。我が校独特のスタイルである独立した委員会体制、そして一昨年から活発になったクラス企画、この2つの骨格を融合させたのが今年度の一高祭です。これは楽しいことは全部やってしまおうという積極的な姿勢から必然的に生まれたものであり、さらに三年生は前夜祭で合唱と、本当にみんな二足どころか三足、四足のわらじで学園祭を謳歌しました。

振り返ってみて一番強く心に残ることはやはり合唱にたどり着くまでの長い道のりです。はじめは反対署名までおこりとても合唱なんて雰囲気ではありませんでしたが、五月になるとどのクラスも負けじと練習に精を出し、当日にはすばらしい歌声がこだましました。一、二年生のみなさんには退屈に感じられたかもしれませんが、どうか来年に続けていってほしいと思います。続いて二日目、三日目も晴天にも助けられ、一般のお客さんもたくさん来てくれてとてもにぎやかでした。一高祭最大の見どころ、「ゲート」には圧巻でした。中世のヨーロッパのノートルダム大聖堂をモチーフにしたとのことですが、完成度の高さには驚きました。そしてたくさんの反省点を残したものの、後夜祭のあの盛り上がり、フィナーレにはすさまじいパワーを感じました。

こんなにも充実した三日間はそれまでのみんなの一つ一つの努力の結果です。何かに向かってガムシャラになってがんばり、言葉にできない、心が震えるような気持ちになれるのは若者の特権です。いつまでも何事にも積極的にとりくむ姿勢を持ち続けていきたいものです。そして心の財産をたくさんつくっていきたいです。

最後に菊池先生、日向先生をはじめ、僕たちの活動を見守り、協力してくださった全ての先生方に感謝します。無能な実行委員長をよそに着実に準備を進めてくれた委員のみんな、精神的に僕を支えてくれた人たち。本当にありがとう。

来年の一高祭がどう発展するか楽しみです。

共同宿泊学習で学んだこと

実行委員長　瀬田　真

カレー作りにチャレンジ

去る七月二十九日から三日間、第一学年共同宿泊学習が行われました。限られた時間の中でしたが、みんな普段では出来ない経験ができたと思います。大自然の中のハイキングや電気を使わない料理などは日常ではまず体験できませんし、何より友達の新しい側面を発見できたと思います。高校生になって三ケ月、クラスの団結力や友情を深める一つの良い機会になったと思います。かくいう僕も実行委員長として、素晴らしい体験をさせてもらいました。初めは無料で下見に行けるという言葉に誘われ参加した実行委員ですが、新しい友達との出会いや降りかかった多くの試練はお金を払ってもいいと思える位のものでした。実際「共宿の思い出」として僕の中に残っているのは嫌な事ばかりです。アンケートを造ってもこっちの意思が伝わらずうまく回収できなかったり、ただ一生懸命こういう仕事をしてるというだけでバカにしてくる人もいました。残念です。でもそういう人は価値観が自分と違うんだから仕方がないと自分にいいきかせがんばりました。現に共宿委員の仲間は大変やる気があり、中学校で生徒会にも参加していたような人が多く、一高のレベルの高さに改めて気付かされる思いでした。共宿が成功したか失敗したかは各個人が決める事だと思います。どんな楽しい事もつまらないと思えばつまらない。その逆もあるのです。僕の中で共宿は大成功でした。

第二十二回一高オリンピック　友情のすばらしさ

一高オリンピック実行委員長　柳澤　洋平

一高オリンピック前日、私の目はある姿に引き付けられました。真剣な眼差しで練習をする三年生たち。これを見て私の頭の中で、〝期待と不安〟が交錯しました。

そして去る、九月十四日、第二十二回一高オリンピックが盛大に行われました。一高祭が終わり、二年生が中心となる初めての行事。実行委員一同「〝友情のすばらしさ〟を再発見できるオリンピックに」という思いで、夏休み前から計画を練ってきました。その甲斐あって大成功で幕を閉じることとなりましたが、実際生徒のみなさんは何を感じ取ったのでしょうか。

ある試合では、一人の人物のミスがクラスの敗けにつながり、彼は棒立ちになってしまいました。しかしそこへ駆け寄ったクラスメイトは「気にするなよ」「ミスしない奴なんていないよ」と言葉をかけていました。ここに一つの友情を感じました。各競技でも多くのドラマが展開されました。そして、担任の先生方を交えた綱引き。先生の経験も生かされ、各クラス特徴のある引き方で熱戦が繰り広げられました。クラスのほぼ全員が参加でき、またオリンピック一タフな競技とあって、手の皮が剥けたぶんだけ深くクラスの絆が結ばれたことでしょう。最後にオリンピックのクライマックス、クラス対抗リレーです。クラスの期待を背負い、全力疾走する選手たち。ここでもドラマが生まれました。一人の選手が転倒してしまいます。そして涙を浮かべ呆然とする選手。しかし共に走った他のクラスの選手が手を取り、また観戦していた生徒たちからは拍手が沸き上がりました。ここには、クラスの枠を越えた一つの輪、大きな「友情の輪」を感じました。

よく「高校時代の友は一生涯の友になる」と聞きます。今回のオリンピックを通して深められ、また新たに作られた友情はきっと永遠のものです。そして〝友情のすばらしさ〟を再発見できたみんなにとってこの日は忘れられない思い出になったと思います。

最後に、私の前日の思いも、一つのことをやり遂げたことの〝達成感と充実感〟により大きな〝自信〟へと化学変化を起こし、自分を成長させるエネルギーになりました。そしてこのオリンピックの計画、立案、実施と、様々な形で御指導下さった先生方、また何よりも私を支えてくれ、一高オリンピックを大成功に導く原動力となってくれた実行委員、各部部活動の部長、体育委員のみんなにお礼を言いたいと思います。本当にありがとうございました。

職員室だより

国語科

本年は、長らく本校で担任・学年主任・進路指導部長としてご活躍くだされた浅野勉先生が牛久高校に、また担任・一高祭担当係としてこまやかな指導に尽力された宮内健治先生が県教育研修センターへと異動されました。

代わって新規採用の奈良由紀子先生と、かつて本校に勤務されたこともある黒田威博先生をお迎えしました。

現在国語科は、一年三名、二年三名、三年四名、計十名の人員です。一年は門井了（一年主任）・吉田智美（一C担任・高29）・奈良由紀子、二年は関勝一（二C担任・高38）・大塚奈美子（高30）・黒田威博（高8）、三年は清水智恵（三C担任）・成島義巳（進路部長・高20）・山田修（高22）・大和田浩一（高25）。

国語科の職員室は本館の三、四階にあります。生徒の様子も手にとるように伝わって来ます。また晴天の、空気の澄んだ日（冬に多い）には筑波だけでなく富士の峰も仰ぐことができます。

学力的には、漢字の読み書き等の語彙力の不足が目立って来ました。パソコン・ワープロの時代になってプリンターの普及したことが大きく影響しているようです。機械に頼るだけでなく、自分の手で文字を書くことの大切さを感じる今日です。

芸術科

向こうの教室で「知識」を学べ、そして、ここでは「知恵」を堀り起こせ。両方の翼を均等に持たなくては、どんなに広い空でも思う所に自由には飛べまい。ましてや、美しいものなど見えはしない。未来に可能性ある君たちのここは翼工房だ。

これは、特別棟2階の美術室（翼工房）の入口の黒板に書いてある、ぼくの生徒たちへのメッセージです。

本校のほとんどの生徒は、豊かな学力と個性を持って入学してきます。しかし、入試という大きな壁の前にだんだん萎縮して小さく固まってしまう傾向にあるのです。一枚の油絵を完成させるのに要する、時間や工夫を考えてみてください。まっ白いキャンバスに向って、何をどんな風にどう描くかということは、一回の人生に似ているとは思いませんか。ある曲は、一小節ずつ指先の感覚でおぼえて、やがてそれをつないで一曲を弾くのと同じで、それは人生のようなものだとぼくたちは教えています。

でき上った絵も曲も、もちろんその生徒独自の世界があり、それぞれが光っています。これを豊かに堀り起こすことが本校生の自己確立の形だと信じています。

いつか、「勉強もよくやったが、芸術の時間は自分探しができて楽しかった。」とふり返ってもらえるように、そういうつもりで取組んでいます。

二月二十日からウララで開催する第3回「百年を駆ける顔たち展」ぜひご覧ください。

保健室

昭和二十九年より、平成三年三月まで三十六年間、保健室は吉田先生が担当されておりました。

その後、保健室は平成五年度より定時制にも常勤講師の養護教諭が採用され、全日制一名、定時制一名の養護教諭で担当しています。現在、保健部の先生方は九名、提、大村、山越、谷口（体育）、舘（数学）、平塚（家庭）、飯竹、小島、染谷（理科）、金塚（養護）で構成され、また、校医の先生、薬剤師の先生方に協力と理解をあおぎながら生徒の健康診断、職員の健康診断、献血、避難訓練、学校の環境衛生等の行事を行っております。

近年、生徒の健康に関する問題が指摘され本校においても、特に心の健康問題の対応が望まれます。保健室を来室する生徒の多くは外科的な訴えで来室するよりも、内科的な訴えで来室します。生徒達の様々な訴えに対して保健室はやすらぎの場所として、又、受けとめてあげる場所として、一時的な逃避の場から生徒達が、自立できるように、きめ細かい配慮が必要だと、思います。

平成八年に保健室にも冷暖房が完備しました。身体の不調を訴えて訪れる多くの生徒達は気持よく利用してます。

各部だより

ヨット部

現在、三年女子二名、一年女子二名の四名で活動しております。

最近のヨット部員の減少は非常に深刻で、関東大会への参加校も毎年少なくなっております。本校も例にもれず、ここ十年ほど三学年ともに部員がいる年はありませんでした。

このように、厳しい状況の中で生徒達は練習を重ねてまいりました。特に本年度はOB会より新艇の寄贈を受け、その御好意にこたえるべく努力を続け、実に十一年ぶりにインターハイに出場する事が出来ました。また、国体にも出場、インターハイ十八位、国体十二位と生徒達にとっては満足できる結果ではありませんでしたが、これまでの練習の成果が充分とはいえませんが、発揮されたと考えております。

リヤスハーバー宮古にて

部の存続すらおぼつかない中ですが、平成十四年の茨城インターハイに向け、部員共々努力して参りたいと考えております。

今後とも御支援の程、よろしくお願いいたします。

（顧問　大浦民雄　鈴木千尋　酒井貴美）

サッカー部

ここ数年部員数は五十名前後と、Jリーグの影響もあり大所帯で活動しています。中学校での経験者も年々増えて、今年度は全員経験者ということで、ひと昔前、初心者が半数いた時代がうそのようです。全国的にサッカーの普及が進み、県全体でもレベルが平均化している中、本校は県大会で最後にベスト四入りしてから九年が過ぎようとしています。毎年県ベスト八入りはするものの、ベスト四の壁があと一歩のところで破れず、くやしい思いをしています。

今年度は、関東大会県大会で二回戦日立工に一―一（PK九―八）で敗退（日立工は準優勝）、インターハイ県大会で準々決勝下館二に二―〇で破れ、ベスト八止まりでした。しかし、県南ジュニア大会（一年生）で初優勝を飾り、今後が楽しみな選手が多数育ってきています。また県南地区選抜にも毎年数名選ばれており、OBの中には、体育系大学で本格的にサッカーに取り組む者もでてきました。

練習は、週六日（一日は練習試合）一日二時間を原則に行っています。限られた時間とスペースで体力をつけ、集中力を養い、サッカーの技術と戦術をいかに効率良く身につけるかを目標に取り組んでいます。

サッカー部OB会の皆様には、毎年多大なる御支援をいただきまして、部員ともども感謝しております。少しでも御期待にそえるようがんばっていきたいと思います。

（顧問／浜野義一　中江哲史　安藤昌俊）

栄光の下の試練

平成十一年度大学入試報告

進路指導部

平成十一年度入試で特筆すべきは、東大三〇名（新卒二一名）、筑波大五六名（新卒四三名）の合格です。東大は二年ぶりに三〇の大台に乗せ、全国公立高校中第二位であり、筑波大は全国第一位を堅持しました。特に後期日程入試で、東大四名（新卒四名）、筑波大一九名（新卒一六名）の合格を出したことは、本校生の粘り強い奮闘の賜物として賞賛に値します。

東大四名のうち三名は前期日程入試に続いての挑戦、筑波大一六名のうち一〇名は前期に続いての挑戦で合格を射止めました。

私大では慶応大が昨年比一九名増の七〇名（新卒四〇名）、早稲田大も六名増の八六名（新卒四七名）の合格者を出し大健闘しました。

その一方で、東工大や一橋大、東北大が伸び悩み、北大や茨城大で合格者を減らした結果、国立大合格者の総数では二三名減の一八九名（新卒一一四名）と大幅に減少するという顕著な特徴も見えました。

公立大・私立大等を加えた合格者総数は三八名減の八四四名（新卒四〇一名）で、新卒生の四年制大学進学者数は、前年比三二名減の二〇二名となっています。再受験の道を選んだ者は一五三名に上ります。

ここ数年、指摘されてきた本校生の難関大学受験志向は、今年の入試で一層の強まりを見せました。東大、東工大、一橋大、東北大、お茶の水女子大、筑波大の六大学に京都大を加えた七大学の総受験数は三四九件、本校現役生の国立大学受験総数の七三％を占め、過去最高となりました。七大学で八七名の合格は健闘とも言えますが、厳しい数字であることは言うまでもありません。

難関大集中受験の見返りとして、合格大学数の減少があります。過去四年間三〇前後であったのが本年は二一となりました。埼玉大、宇都宮大などは受験者〇、群馬大は受験者三名で合格者〇でした。その他、少人数ながら受験はしていて合格者〇となった国立大は一六に上ります。

公立大についても昨年の五大学七名合格から、二大学三名の合格に減少しました。

本校生が、志を高く難関大に果敢に挑む背景には、将来への進路設型への確固たる価値観が存在していると思われ、単にランキングの上位の大学を受験して自分を試すといった短絡な志向のためではないはずですが、右の数字は、受験大学の選択や組み立ての面で一考の余地があることを示しているように思われます。同時に、高い志望をする以上、それに見合う一層の実力を涵養していくことが課せられた急務であると言えます。

平成11年度入試合格状況

主要国立大学

大　学	合格者	新卒
北海道大	5	1
東北大	12	7
茨城大	2	1
筑波大	56	43
千葉大	13	8
お茶の水大	7	4
東京大	30	21
東京外語大	5	3
東工大	11	5
一橋大	7	3
横浜国大	11	6
名古屋大	1	0
京都大	7	4
上記大学計	167	106
その他計	22	8
国立大計	189	114

主要私立大学

大　学	合格者	新卒
青山学院大	31	13
学習院大	23	12
慶応大	70	40
国際基督大	7	5
上智大	21	9
中央大	24	10
津田塾大	6	5
東京女子大	10	7
東京理科大	94	36
日本女子大	15	12
明治大	36	17
立教大	26	15
早稲田大	86	47
上記大学計	449	228
その他計	191	53
私立大計	640	281

公立大・大学校等

大　学	合格者	新卒
茨城県立医療大	3	2
高崎経済大	1	
京都府立大	1	1
公立大計	5	3
防衛	7	2
気象	1	
大学校計	8	2
筑波医療技短	1	1
国立短大計	1	1
鶴川女子短	1	
私立短大計	1	
合格者総計	844	401

平成10年度 進修同窓会決算書

収　入　額　一金　23,379,832円也
支　出　額　一金　14,225,846円也
差引残高　一金　9,153,986円也

【収　入】　単位：円

	項　目	予算額	決算額	比較増減	備　考
1	繰越金	10,470,220	10,470,220	0	前年度繰越金
2	終身会費	100,000	30,000	△70,000	
3	年会費	5,000,000	10,949,000	5,949,000	
4	入会金	1,900,000	1,920,000	20,000	新会員全·定384名×5,000円
5	寄付金	0	0	0	
6	雑収入	4,780	10,612	5,832	預金利息
	合　計	17,475,000	23,379,832	5,904,832	

【支　出】

	項　目	予算額	決算額	比較増減	備　考
1	総会補助	700,000	694,460	5,540	資料、会場設営外
2	会報発行費	4,000,000	3,526,823	473,177	会報印刷代、送料
3	通信費	300,000	31,264	268,736	はがき代他
4	卒業記念品費	200,000	160,000	40,000	卒業証書用筒代
5	卒業25、40、60周年記念品費	400,000	400,000	0	
6	会議費	500,000	175,902	324,098	
7	支部連絡費	300,000	220,000	80,000	支部会補助
8	生徒奨励費	600,000	600,000	0	生徒会補助他
9	別途積立金	4,000,000	4,000,000	0	積立会計へ
10	慶弔費	100,000	0	100,000	
11	事務局費	1,000,000	417,397	582,603	サラト事務処理費他
12	還付金	50,000	0	50,000	
13	予備費	5,325,000	4,000,000	1,325,000	モニュメント建立補助(300万円) 定時制50周年記念事業補助
	合　計	17,475,000	14,225,846	3,249,154	

上記のとおり決算しました。　※項目間の流用を認める。

平成11年3月31日

進修同窓会会長　幡谷　祐一

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

平成11年3月31日

監事　野山　茂　印
監事　長南　紀郎　印

進修同窓会会務分担（平成11年度）

1．本部

担当	本部役員		学校	主な業務
総務	豊嶋	木島　説田　小野(慶) 谷中　中川	教頭 校内幹事	会議の招集・設営・進行 同窓会の総括的業務
経理	青山	小野(治)　石川　渡辺 柴沼　小城	事務部 校内幹事	予算編成と執行・決算 諸会費等の徴収
会報	横田	木島 谷中 堀越 宇田川 宇田 鈴木(志) 鈴木(淳)	教頭 校内幹事	会報の編集・発行
名簿	大曽根	梅澤 小網 柳沢 野村 草刈 小城	教頭 校内幹事	名簿の編集・発行 会員の情報収集・整理
事務局	横田 大曽根 桜井	谷中　野村	教頭 校内幹事	事務局との相互連携
監事	野山　長南			本会会計の監査

2．支部

支部会等に際して、本部に対し出席要請がある場合は、会長又は下記の副会長のうち1名が、校長(または代理)とともに出席する。ただし、遠隔地の場合にはこの限りでない。

豊嶋、横田、大曽根、青山、植木、幡谷(浩)、桜井

3．進修同窓会校内幹事

高20 成島義己(国語)　高26 足立一夫(数学)　高30 大塚奈美子(国語)
高31 谷口　実(体育)　高16 飯嶋　宏(定時)　事務室長 矢ノ中芳夫
主事 藤井幸代

進修同窓会基金管理委員会

進修同窓会会長　幡谷　祐一（中40回）
委　　員　11名
　進修同窓会副会長4名
　　豊嶋　貴（中37回）
　　横田　尚義（中44回）
　　大曽根宏亮（高4回）
　　桜井　光孝（定4回）
　全日制教頭　1名　濱田　洋一（高11回）
　事務室長　1名　矢ノ中芳夫（高12回）
　その他　5名
　　青山　和義（高8回）副会長
　　長瀬　宗男（高11回）校長
　　木島　幸夫（高1回）本部幹事
　　谷中　良雄（高12回）〃
　　野村　ルナ（高15回）〃
監　　事　2名
　　野山　茂（中39回）
　　田嶋　栄吉（高11回）

編集後記

昨夏の猛暑下の特別棟耐震工事が完了し、学習環境の整った中、平成十一年度が着実に進行しております。

会報第五十六号の編集にあたり、多数の原稿、貴重なお写真などお寄せ戴き有難うございました。紙面の関係で、すべて掲載できなかったことや、手を加えさせて頂きましたことを深くお詫び申し上げます。

今後とも、進修同窓会会報にご理解・ご協力を賜りますよう宜敷くお願い申し上げます。

◇　◇　◇

進修同窓会会報第56号
発行日　平成十一年十一月五日
同窓会会報編集委員会
編集委員長　横田尚義
編集委員　谷中良雄　堀越博
木島幸夫
鈴木志郎　宇田川仁一郎
宇田邦利　鈴木淳一
濱田洋一　成島義己
足立一夫　大塚奈美子
谷口実　飯嶋宏

会費納入のご報告とお願い

平成十年度の会費納入状況は、三月末現在、三千三百五十一名の皆様から、千九十七万九千円をいただき誠に有り難うございました。

今年度も納入していただきたく振替用紙を同封いたしました。会費は、同窓会事業費に当てられますので、よろしくご協力のほどお願いします。

「会員名簿」の取り扱いのお願い!!

本会では五年毎に、同窓生相互の縦横の連繋並びに各分野でご活躍の母校関係者のさらなる発展等を祈念し、会員名簿を発刊しておりますが、プライバシー漏洩等にも配慮し、取り扱いには十分ご注意のほど、お願いいたします。